

學大科法學大國帝都京

# 叢論濟經

號一第 卷五第

行發日一月七年六正大

## 論說

生物進化論ノ誤解……………

理學士 川村多實二

露國ノ資本主義ト最近ノ大革命(二)……………

米田庄太郎

飛脚ノ變遷(二)……………

法學士 本庄榮治郎

現代的保險ノ成立(二)……………

法學士 小島昌太郎

## 時事問題

英國特惠稅問題……………

法學博士 戸田海市

會社使<sup>ニ</sup>慰勞賞與金<sup>ニ</sup>對<sup>スル</sup>所得稅<sup>賦</sup>問題……………

法學博士 神戸正雄

## 雜錄

經濟雜話(一〇)……………

法學博士 田島錦治

所謂“Welfare Work”ニ就キテ……………

山本美越乃

群馬縣ノ製絲業……………

法學士 河田嗣郎

基礎社會ノ發達ニ就イテ……………

文學士 高田保馬

國民經濟講話及貧乏物語<sup>ヲ</sup>讀ム……………

瀧本誠一

## 飛脚ノ變遷(二)

本庄榮治郎

飛脚ノ變遷ニ就テハ既ニ定論アリ。大日本輿志稿及ヒ同考證ニ載スル所最モ詳細ニシテ、横井博士ノ日本商業史ヲ始メ、日本交通史論ニ掲ケラレタル藤田學士ノ「江戸時代ノ交通」其他飛脚ニ關スル論文何レモ之ニ資ハサルモノナキ也。然レトモ此等諸家ノ高論ノ中ニハ編年体ノモノ多ク、叙事紛糾、雜然トシテ要ヲ得難ク、一讀再讀タガ僅カニ種々ノ變遷アリシトイフコトチ漠然然腦裡ニ印スルノミニシテ、如何ナル事項カ如何ニ變化發達シタルヤノ點ニ就テハ簡明ニ知得シ難キ憾アルモノナキニアラス。乃チ爰ニ聊カ叙事ノ系統ヲ立テ異類ヲ分チ以テ江戸時代以降ノ飛脚ノ變遷ヲ略述シ、投稿ノ實ヲ察カントス。若シ夫レ舊飛脚業者及ヒ各宿驛ニ殘存セル未公刊文書ニヨリテ新ナル方面ノ研究ヲ加ヘンカ如キコトハ將ニ他日ヲ期セン而已。而シテ本稿説ク所ノ項目凡ソ次ノ如シ。

序言——第一、幕府總飛脚——第二、大名飛脚——第三、民間飛脚業——一、町飛脚ノ濫觴——二、地域ノ擴大——三、客体ノ範圍及制限——四、飛脚便ノ種類、日限及運賃——五、速達方法ノ發達——六、仲間規約——七、江戸町飛脚——第四、飛脚業ノ衰滅——結言。

## 序言

我國ニ於テ現今所謂郵便ナルモノノ行ハルルニ至リシハ、勿論維新以後ノコトニ屬スト雖、一般通信ノ機關ハ既ニ早ク大化改新ノ際ニモ存シ、近世徳川幕府ノ時代ニ入りテハンソノ發達頗ル大ナルモノアリ、カノ繼飛脚、町飛脚ノ如キハ當時ノ通信機關トシテ最モ重要ナルモノトス。而シ

テ現時ノ郵便カ必ズシモ文書ノ送達ノミナラズ物品ノ遞送、送金爲替等ヲモ行フガ如ク徳川時代ノ飛脚ニ在テモ亦物品及ヒ金銀ノ送付行ハレタリ。タダ當時飛脚ノ中堅ヲナシタリシ町飛脚ニ就テハ私人ノ營業トシテ行ハレ、公用ト雖重大ナラザルモノハ、亦コノ營業者ニ託シテ意思ノ傳達ヲ行ヒシコトハ現時ノ官業主義ト大ニ異ル所トス。今徳川時代以降ニオケル飛脚ノ變遷ヲ説クニ當リテハ先ツ幕府ノ設クル所ノモノト、諸候ノ專用スルモノト、民間ニ行ハルルモノトノ三種ニ區別スルコトヲ便宜トス。<sup>1)</sup>

## 第一 幕府繼飛脚

幕府ノ設クル所ノ通信トシテハ繼飛脚ナルモノアリ。繼飛脚トハ各宿驛ニテ人馬ヲ繼キ代ヘテ信書貨物ヲ遞送スルノ意ニシテ、ソノ携帯スヘキ官狀ハ御老中證文ト稱シ、諸國ニ令スル所ノ重要ナル公文書ナリ。コノ公文書ヲ收メタル御狀箱ハ江戸傳馬町ヨリ差立、品川名主ニテ受取、順次宿驛ヲ經テ遞送スルモノニシテ京大阪等ヨリ公書品川ニ到着スレハ名主ハ直ニ之ヲ老中ニ差出スナリ。

(註) 今、繼飛脚ノ狀態ヲ述ヘンニ先ニ一人ノ走夫御用ト書シタル長柄ノ高坂提灯ヲ持シ、次ニ又走夫ガ極メテ小ナル狹穢ノ小葛籠ニ御用ノ會符ヲ附シタルモノヲ肩ニシテ疾馳ス。コノ繼飛脚ハ道中ニ於テ大ニ威勢ヲ振ヒシトイフ。<sup>2)</sup>

始メ天正十八年(1590)家康關八州ヲ領シ、江戸ニ入ルヤ江戸寶田村千代田村ノ村民馬込勘解由、高野新右衛門、小宮善右衛門等驛馬人夫ヲ率キテ之ヲ迎フ、家康之ニ道中傳馬役ヲ命シ武州豊島

1) 本稿引用ノ事實ニシテ註記ナキモノハ縣志稿及ヒ同考證ヲ看ルヘシ  
2) 種知雲湖、飛脚ノ變遷ヲ論ス(日本交通史論所掲) 494頁

郡高田村ニ於テ高十二石三斗六升ノ地ヲ給シ、以テ繼飛脚ニ對スル俸米トス。之ヲ繼飛脚給米ト云フ。慶長六年(1601)ニ至リ東海道各驛ニ問屋場ヲ設ケ傳馬三十六匹ヲ常置シ、一匹ノ飼料ヲ四十坪トシテ一驛一千四百四十坪ノ地ヲ與ヘ、又豫メ問屋場ニ交付セル印鑑ト同一ノ傳馬朱印ヲ押捺セル證符ヲ有スル者ニ非レハ傳馬ヲ使用スルコトヲ得サリキ、寛永十年(1633)ニハ諸街道各驛ニ繼飛脚給米ヲ附與セシガ、コレ等各驛ニ常置スヘキ人馬ノ數ニ至リテハ時々變更アリタルコト勿論ナリ。

江戸傳馬町ヲ發スル公書遞送時間ニ就テハ元祿九年(1696)ノ規定ヲ見ルニ左ノ如シ。

口 光 急行八時半乃至九時 通常九時乃至九時半(一時ハ今ノ二時間半ニ當ル。故ニ半日強ニ當ル)

駿 府 急行十一時 通常十二三時(一日強)

伊勢山田 急行二十七八時 通常三十一時(二日半)

京 都 急行四十一時 通常四十五時(三日半)

無冠ト稱スル最急便ハ二十八時乃至三十時(二日半)

大 阪 通常四十八時(四日)

寶曆十三年(1763)京都大阪ヨリ發スル繼飛脚公書遞送ノ時間ヲ改正シタルガ、コレニヨレハ京都ヨリ江戸ニ至ル尅付證文ヲ以テ遞送スル急公用ハ三日限、中急用四日限、又諸役人ノ發スル公書送達(問屋賄)ノ時限ハ大急用五日限、中急用六日限、平常便七日限トス。大阪ヨリ江戸ニ至ルモノハ三十六七時限、若中山道ヲ通行スレハ四十五六時ナリ。

8) 驛肝録(古事類苑、政治部四、135頁)ニ曰ク諸御役人御用狀ノ儀ハ宿々問屋方ニ而取計、問屋賄ト唱候云々

繼飛脚ノ制度ハ幕末ニ至ルマテ存續シタルモノナリト雖、尙後ニ述フルカ如ク寛文三年(1663)ニハ既ニ民間ニオケル飛脚業ノ興レルアリ、從テ京都大阪在番諸士、近國代官等ヨリ發スル公用モ亦コレ等民間ノ飛脚業者ニ託シテ行ハレシヨトアルハ、寛延文化天保等ノ各時代<sup>4)</sup>ニ於テ、コレ等ノ公書ヲ取扱フ飛脚業者ヲ一定シ、又ハソノ發送ノ定日ヲ定メタル等ノコトアルニヨリテモ知リ得ヘキ也。

## 第二 大名 飛脚

徳川時代ニアリテハ諸侯ハ隔歲江戸ニ參觀シ或ハソノ采邑ニ就クノミナラス、江戸ニハ藩邸ヲ設ケテ妻子近親ヲ居ラシメ、又留守居ヲ置キテ公務ヲ辨セシム。故ニ江戸ト采邑トノ間ニハ常ニ往復交通スルノ要アリ。乃チ諸大名ハ町飛脚ヲ利用スルノ外、又繼飛脚ニ倣ヒテ江戸ト藩地トヲ往復スル通シ飛脚ヲ特置シ多クハソノ下卒ヲ以テコレガ任ニ當ラシメタリ。タダ尾州家及ヒ紀州家ニアリテハ東海道路次七里毎ニ一ノ小舎ヲ設ケ各舎ニ脚夫ヲ配置シ互ニ遞傳シテ書函ヲ送達セシム。世ニ之ヲ七里飛脚トイヒ、ソノ宰領ヲ御七里衆トイヘリ。

七里飛脚ノ制ハ尾州家ニアリテハ武藏國程原郡六鄉村ヨリ東海道池鯉鮒ニ至ル間二十八ヶ所ノ小舎ヲ設ケ、茲ニ脚夫ヲ在宿セシメ公用信書及ヒ飛脚荷宰領其他諸般遞送ノコトニ與ラシメタリ。而シテ七里ノ者ノ往復ニ就テハソノ當初一定ノ期日ナク、一ニ便宜ニ從ヒタダ出發ニ臨ミテ之ヲ各通知スルノミナリシガ、正徳五年八月之ヲ不便トシ、出發期日ヲ毎日朔日五日十日十六日

4) 駒越志稿 139, 144, 145, 同考證 265, 343頁

二十日二十六日ノ六日ト定メ、書信荷物ヲ託スルモノハ前日四ツ半マテニ持參セシムルコトトセリ。遞送時間ハ事ノ緩急ニヨリテ四種ニ分チ最モ早キヲ一文字トイヒ、二十四時間乃至二十六時ヲ要シ、出立後三日目ニ江戸ニ着シ、次ヲ二人前トイヒ、二十六時乃至三十時ヲ要シ四日目ニ着ス。次ヲ十文字ト呼ヒ三十時乃至四十時ヲ要シ、五日目ニ着スル也。ソノ最モ遅キハ無刻附ト稱シテ五日半或ハ六日ヲ要シタリトイフ。寛文九年(1669)以前ハ一箇所二人ツツ七里ノ者ヲ止宿セシメシガ、コノ年五月二人宛トセシカハ總計三十六人トナリ一人ニ就キ五石二人扶持ヲ給セリ。此等脚夫ハ中間ヨリ採用シ一ヶ所ニ一年ツツ四ヶ所勤メタル上五ヶ年目ニ引キ代ラシムル制度ナリ。然レトモ其施設ニ多額ノ經費ヲ要シ且七里ノ者モ苦役ニ堪ヘサルヲ以テ享保中公用物ヲモ町飛脚ニ託スルノ方法ヲ開キ、文政六年(1823)財政不如意ノ折柄一タヒ之ヲ廢シ町飛脚ヲシテ公用ヲ辨セシムルニ至リシガ、天保ノ末之ヲ復シ安政四年(1851)三月再ヒ之ヲ廢スルコトナレリ<sup>5)</sup>

紀州家七里飛脚モ亦右ト同シク七里毎ニ小舎ヲ設ケテ江戸和歌山間ノ公用狀送達ニ任シタルモノナルガ、ソノ遞送ノ時日ニ就テハ毎月三次五十ノ日(江戸、五ノ日、若山、十ノ日)ニ發送シ道中八日目ニ着スルヲ常便トシ、コノ外緩急ノ諸便アリテ勘定所ノ捺印數ニ因リテ之ヲ區別セリトイフ。即チ左ノ如シ<sup>6)</sup>

一印 繼立人足二人掛リ 八十五時(七日ト一時)

一印 聲掛リ 七日

二印 人足三人掛リ 八十時(六日半ト二時)

5) 名古屋市史、政治編第二、305-6頁。古事類苑、政治部四、1331-2頁

6) 南紀徳川史卷七十七。和歌山史要 145頁

二印 聲掛リ人足四人掛リ 七十七時半(六日ト五時半)

御使之者代リ 人足五人掛リ 五十時(四日ト二時)

御使之者ハ御小人ヨリ出役ス。ヨノ者代ルノ故チ以テ此名アリ

三ツ印 人足六人掛リ 四十五時(三日半ト三時)

藩士薨去ノ如キ大變ハ此便ニヨル、一便ノ聲凡ソ三百兩ニ上ルト云フ。

(註) 一、南紀徳川史七十七ニヨレハ七里役所ノ配置ニ就テハ二説アルカ如シ、ソノ一ハ東海道神奈川宿ヨリ宮宿ニ至ル十三ヶ所ニコンテナオキ、御用狀ハ伊勢地川俣街道通行ト定メ、右ヨリ以西ハ碓氷ノ飛脚屋某受負ヒテ若山迄郵送シタリトイヒ、他ノ説ニヨレハ川俣街道ニモ尾州佐尾ヨリ紀州名手ニ至ルマテ十ヶ所ノ役所ヲ置キシガ、後參觀往來ハ勢州路ニヨラス、上方道ヲトルニ及ンテ尾州起ヨリ紀州山口驛ニ至ルマテ泉彥城江尾五ヶ國ニ亘リテ十ヶ宿ヲ設ケタリトイフ。道中秘書ハ前説ヲトリ和歌山史要ハ後説ニヨリ、驛志稿ハ神奈川ヨリ佐屋ニ至ル中間十四ヶ所ニ七里役所ヲ設ケタリトイヘリ。

二、七里ノ者ハ一役所ニ二人ヲ置キ風地木綿ニ龍虎杖竹ナドヲ紅染ニシ黒天鷲絨ノ半襟シタル半纏ヲ着ケ、赤房ノ十手及ヒ一刀ヲ帶ス、傍ラ御參暇往來ノ供、蘭札ノ辛風、家中往來先觸、人足繼立、地領隠密等ノ任ニモ當レリ。脚夫ハ中間ヨリ、支配ハ中間頭ヨリ選擇スルトコロニシテ五ヶ年目ニ引替ラシムルコト尾州ノ制ノ如シ。給米一人半扶持一ヶ年銀二百目ニ過キサレトモ葵紋章ニ羽振チキカセテ相常利殖ノ道ヲ有シタリトイフ。

尾州紀州兩藩七里飛脚ノ制ハ以上述フル所ノ如クナルガ南紀徳川史(卷七)ニハ「是御三家及雲州

松江(松平出羽守)川越(松平大和)藩ニ限レル如シ」トアルヲ以テ尾紀兩藩ノ外ニモ七里飛脚ヲ置キシ

モノアルヲ見ルヘシ。然レトモ亦諸藩中ニハ必スシモ自己專屬ノ機關ヲ特置セス、町飛脚ニ託シテ通信ヲナシタルモノアリ、殊ニ後代ニ至リ町飛脚次第ニ發達スルニ及ヒ尾州藩ノ如クソノ專屬ノ機關ヲ廢シテ之ヲ町飛脚ニ託シ、或ハ兩者ヲ併存シタルモノアリシカ如ク、又江戸ニ對シテハ

7) 古事類苑政治部四、1332-3頁

8) 144頁

9) 和歌山史要 144頁、古事類苑政治部四、1332頁

七里飛脚等ノ機關アリトスルモ、ソノ他ノ地方ヘノ通信郵送ニハ町飛脚ニヨルノ外ナカリシコトヲモ考ヘサル可ラス。例ヘハ水戸家公用ハ天明元年以來島尾佐右衛門ノ掌ル處ニシテ紀州家公用茶荷物ノ發送ハ大阪屋茂兵衛之レニ與レリ。其後寛政元年ニ至リ島屋大阪屋和泉屋三家ハ一ノ組合ヲ作り島屋ハ水戸家、大阪家ハ紀州家ノ公用物ヲ毎月九回二六九ノ日ニ發送シ、和泉屋ハ島屋大阪屋両店ノ遞送ヲ補助スルコトトナシタルカ如キ、又尾州家ガ文政年間七里飛脚ヲ廢シタル際ソレト同時ニ從來町飛脚ニ託セシ京都毎月十五日往復便ヲモ廢シタルヲ以テ見レハ、京都ニ對スル公用ハ特殊ノ飛脚ヲ設クルコトナク、町飛脚ニ依託セシコト明カナルカ如キ以レモソノ一例ニ過キサル也。サレハ私人營業タル民間飛脚業ハ單ニ私人ノ通信ノミナラス幕府公用ニツイテモ之ヲ取扱ヒ、且諸侯ノ通信ニモ與リシヲ以テ當時ノ通信機關トシテ最モ重大ナルモノナルコトヲ認めサル可ラス。

### 第三 民間飛脚業

#### 一、町飛脚ノ濫觴

民間ニオケル通信方法即チ所謂町飛脚ナルモノハ元和元年ニ大阪城定番ノ諸士ガ其家隸ヲ以テ飛脚トナシ家信ヲ江戸ニ通シタルニ濫觴ス。彼等ハ先ツ東海道各驛ノ問屋場役人ト商議ヲ遂ケ或ル制限ノ下ニ問屋ハ人馬ヲ供給シ毎月三度八ノ日(註一)ニ江戸ニ往復シテ三度飛脚トイフ。其後大阪ノ商賈等竊ニ之ニ倣ヒ、飛脚ヲ營ム者アリト雖、彼等ハ大阪城番諸士ノ下卒ノ名



ヲ藉リ、其法被ヲ着シ而乃ヲ佩ヒ以テ道中ノ賊難ヲ避ケ三都ノ間ヲ往復シタリトイヒ、又大名飛脚ノ名ヲ藉リ或ハ紀州様御用達等ト稱ヘテ商品ヲ送ル者モアリシトイフ。此等ノ方法ハ未タ公然私人ノ營業トシテ行ハレタルモノニアラスト雖、實ハ民間飛脚業ノ濫觴ヲナスモノトイフヘク、ソノ大阪ニ於テ先ツ興リタル所以ノモノハ蓋一方ニ大阪城番諸士ノ庇蔭ニ倚ルヲ得タルト、他方ニハコレ等諸士ノ通信ノ外當時ノ大阪ガ經濟上商業上ノ中心地トシテ諸般通信ノ必要多カリシトニヨラスンハ非ス。

然レトモ時運ハ進歩ス、カクノ如キ姑息ナル方法ニヨリテ三都ヲ往來スルハ未タ大ニ爲ス所以ニアラズ。ココニ於テカ寛文三年(1663)ニ至リ三都ノ商人相議シテ遂ニ此等諸士ノ庇蔭ヲ離レ武裝ヲ解キ町人ノ姿ヲナシ、町飛脚問屋抱宰領某ト稱シ公然ソノ業ヲ營ミ、幕府ノ公許ヲ得、問屋場ニ於テ一回ニツキ傳馬三匹ノ繼立ヲ受ケ三都往復ノ飛脚業ヲ開始セリ。是レ即チ町飛脚ナリ(三都定飛脚トモイフ)。當時町飛脚ノ東海道通行ノ日數六日ナリシヲ以テ時人之ヲ呼テ「定六」トイヘリ(註二)。當時コノ問屋ニ屬スルモノ江戶七名京都三名大阪四名合計十四名ニシテ飛脚ノ出發日ヲ毎月一四七ノ九回トス(而シテ大阪城中ノ公用ヲ辨スルモノハ町飛脚ニ對シテ本飛脚ト<sup>10)</sup>。翌年七月大阪出發ヲ毎月二日十二日二十二日ノ三回トシ(名稱ヲ生シタリ)公私ノ書信スヘテ此便ニ託スルコトトナレリ。是レ即チ江戶京都大阪ノ間ニ公私ノ郵便ガ私人ノ營業トシテ起リシモノニアラスヤ。然レトモソノ配達方法ハ實ニ幼稚ヲ極メソノ當初ニ於テハ大阪飛脚ハ江戶ニ着ンテ其宿泊旅館ノ戶外ニ蓆席ヲ敷キ書狀及貨物ヲ排列シテ路人ノ一覽ニ供シ觀者ソノ自己ニ宛名スルモノアルヲ發見スレハ飛脚ニ請フ

10) 大阪市史第一、394頁

テ之ヲ受領シ其歸便ノ時日ヲ問ヒテ返書ヲ託セリト云フ。ツノ後町飛脚ノ行ハレタル後ニハ日本橋廣小路へ毎朝吠ヲ据エ飛脚ノ目標ヲ揭示スルニ止マリ番人ヲ附添ヘズ書狀差出人ハ書狀ニ賃錢ヲ結ヒ付ケ之ヲ吠ノ中ニ投シ、飛脚屋ハ毎夕之ヲ取集メテ遞送シタリト云フ。尤後代ニ至リ飛脚業ノ發達ト共ニ信書貨物ノ集配方法モ亦從テ發達シタルコトハ仲間規約ヲ述フル所ヲ參照セハ自ラ明カナルモノアラン。

(註) 一、櫻淵志稿一二四頁ニハ毎月三度八ノ日云々トアルモ同考證一四三頁ニハ毎月三度日數八日ヲ限リテ江戸ニ往復シタル旨ヲ記シ、後者ニ據レルモノ多ト雖、四日限ニテ江戸京阪間ヲ通行スルハ當時ノ飛脚トシテハ例外の急便ニ屬スル如ク考ヘラルルチ以テ余ハ寧ロ志稿ニ説ク所ニ據レリ。

二、安永二年十一月江戸定飛脚九軒選署ノ間屋株願書ニ『私共飛脚交資之儀ハ古來寛永年甲ヨリ上方道中筋諸國御代官御用並ニ御大小名様方御預リ所御用次ニ御武家様方御平生御用ヨリ町方諸問屋共商用ニ至ル迄年來相勤來……右御用相勤候日限之儀者古來並飛脚ト申候ハ八日九日限リ、早飛脚ト申候者五日六日限ト御請資奉申上候』云々トアルニヨレハ所謂定六ナルモノハ早着六日ノ儀ナリト解スルチ適當トスルカ如シ。

## 二 地域ノ擴大

町飛脚ノ制度ハ前述ノ如ク東海道三都間ニ行ハレタルモノナルガンノ地域ハ漸次擴大セラレ約六十年後ノ享保年間ニハ上州高崎(三年。紙屋)陸奥福島(九年。上州)上州伊勢崎(十四年。島屋佐七)上州藤岡(二十二年。近江)等ニ飛脚營業開始セラレ中山道奥州街道ニ迄通運ノ便ヲ開キシノミナラス、元文元年(二二〇)越後新潟ノ飛脚ソノ領主ノ繪符ヲ磨造セシコト發覺シ刑セラレシ由見ユルヲ以テ當時新潟ニモ飛脚ノ行ハレタルコトヲ知ルヘシ。延享三年(一七四六)ニハ江戸島屋ハ更ニ奥州福島京都間及ヒ江戸

11) 日本橋區史第一册 533-534頁

12) 樋畑氏、前掲、501頁以下、

備中松山間ニ飛脚ヲ開始シ、寶曆年間ニハ上野國ヨリ三都ニ通スル定飛脚開カレ(元年)江戸備後間、江戸丹波美作間ノ飛脚業起リ、又一時衰微シタル江戸福島間ノ飛脚業モ復興セラレ(以上)十三年(1793)ニハ島屋ハ仙臺ニソノ問屋ヲ設ケタリ。其後安永二年(1793)三都定飛脚問屋等相議シテ東海道ニ二十八ヶ所ノ取次所ヲ設ケ、西上州路奥州甲州道中ニモ亦取次所設ケラレシカ、此等各地ニ定期飛脚發着シ、本線ヨリ更ニ支線ヲ發シテ各附近ノ地ニ及ヒタリトイフ(註)。天明三年(1793)ニハ又取次所ヲ木曾街道ニ設ケ、文化三年(1806)ニハ大阪島屋三右衛門ハ西國筋米飛脚ヲ創業シタルモ天保八年ニ至リテ止ム。降ツテ安政三年(1856)江戸島屋佐右衛門ハ中山道追分驛ヨリ信州善光寺ヲ經テ越後新潟ニ至ル定期飛脚ヲ開ケリ。尙大阪市史ニヨレハ寛政天保ノ頃同地ニハ江戸飛脚、京飛脚ノ外長崎、紀州、尾州、但馬、丹波、備前津山、三田有馬、池田伊丹、奈良郡山、南都、伊賀伊勢、津山因州、播州姫路各飛脚アリシヲ以テ見レハ飛脚制度ハ單ニ三都間ノミナラス、五街道ニオケル主要ナル都會ニ及ヒ、コレヨリ更ニ支線ヲ出シテ各地方ニ普及シタリシコトヲ知ルヘキ也、然レトモ現時ノ郵便カ如何ナル邊陲ノ地ニモ存セサルコトナキノ狀ニ比スレハ宵壤壹ナラサルノ差アリトイフ可シ。

(註) 上州及甲州路ノ取次所ハ藤岡、高崎、伊勢崎、前橋、桐生、大間間、及甲府ナリ。而シテ藤岡ヨリ、小幡、七日市ニ、高崎ヨリ安中、妙義沙ケ森ニ、桐生ヨリ勢真田及新田ニ、大間間ヨリ足尾銅山ニ通スル支線アリ。且桐生大間間甲府ヨリハ其物貨集合ノ多寡ニ應シ直ニ木曾路ニ入り、沿道各地ノ委託ヲ受ケ京都ニ達ス。奥州街道ノ取次所ハ宇都宮、喜連川、白川、郡山、二本松、福島、桑折、仙臺八ヶ所ニシテ郡山ヨリ三春、大宿ニ、二本松ヨリ川俣及羽州代官所ニ、桑折ヨリ半田鍋山ニ、仙臺ヨリ一ノ關ニ通スル支線アリタリトイフ、以テ飛脚線路網ノ一斑ヲ察ス可シ。

### 三 客體ノ範圍及制限

飛脚ノ目的物ガ信書ニ存スルコトハ勿論ノコトナルガ、小荷物ノ遞送モ亦共ニ行ハレタリ。寶文十一年(1651)ニ至リテハ大阪飛脚問屋島屋三右衛門江戸ノ飛脚問屋備前屋與兵衛等相議シテ兩地商人間ニオケル金銀ノ遞送ヲ取扱フコトトナリココニ金飛脚ナル招牌ヲ掲ケ、其後組合員中ニ月番ヲ定メ之ヲ担当スルコトトセリ。當時コノ組合ニ入レル飛脚問屋十四軒ニシテ各人銀百枚ヲ出シテ以テ營業ノ資金ニ充テタリ。之ヲ手板組トイヘリ。蓋手板トハ物貨遞送ノ證券ニシテ券首ニ遞送品目ヲ擧ケ、次ニ發送者受領者及金飛脚屋ノ姓名ヲ記入シ、發行ニ臨ミ、發送者及金飛脚屋ノ氏名下ニ調印シ、飛脚ハ記載ノ金品ヲ受領者ニ送致シタル時ノ捺印ヲ請ヒ之ヲ金飛脚屋ニ返却シ後證トスルノ制ナリ。コノ金銀遞送ハ其後飛脚ノ行ハルル地域ノ擴大スルニツレ、各地ニモ普及シ單ニ江戸大阪間ノミニアラサリシコトハ三都以外ノ飛脚賃錢ノ規定中ニモ金銀遞送料ヲ記載セルニヨリテモ之レヲ知り得可シ。例ヘハ寛保二年(1742)ニ手板組飛脚商相議シテ東海道及中國筋金銀遞送法ヲ改正シタル際中國筋金百兩賃銀九匁五分トナセシ由見ユルヲ以テ金銀ノ遞送ハコレヨリ以前ニ中國筋ニモ行ハレシコトヲ知ルヘク、尙寶曆元年(1751)上野國ヨリ三都ニ通スル定期飛脚ヲ開キ、其賃錢ヲ定メタル際ニモ金銀遞送賃錢ノ規定アルカ如キソノ一例也。

延享三年(1746)ニ至リ江戸島屋ハ奥州福島ヨリ京都ニ往復スル荷物ノ保險及ヒ金銀爲替ノ途ヲ用キタリトイフ。尤コノ荷物ニ對スル保險カ如何ナル方法ニヨリテ行ハレタルヤハ詳ナラスト雖、金銀爲替ノ途ノ開カレタルコトハ前述ノ金飛脚ノ方法ニ一步ヲ進メタルモノトイハサル可ラス。

更ニ米飛脚ナルモノアリ、コハ文化三年(1806)ニ大阪島屋ガ西國筋各地方ニ對シテ開始セシモ

ノニシテ各地ノ賃銀ヲ定メ毎月十度ノ常便ヲ發セリトイフ。然ラハコノ米飛脚ナルモノノ實質ハ如何トイフニ、余ノ參考セシ論著中ニハタタ米飛脚開始ノ事實ヲ擧クルノミニテソノ實質ニ亘リテ説明ヲ加ヘタルモノ一モコレナクソノ性質明カナラス。思フニ前述ノ金飛脚ガ金銀ノ遞送ヲ内容トセルト同シク、コノ米飛脚ハ米穀ノ輸送ヲ目的トスルニ非スヤト考フルハ文字上或ハ直覺セラルル處ナランモ、余ノ考フル所ハ然ラス。驛遞志稿考證(三三九頁)ニ曰フ處ヲ見ルニ、

『是年大阪北濱一丁目島屋佐右衛門(三右衛門ノ誤ナラン)西國筋米飛脚ヲ創業シ毎月十度ノ並使ヲ發ス其各地賃錢左ノ如シ、播州明石銀三分、同姫路銀五分……備前岡山銀六分……肥後熊本銀四匁五分ナリ。右書狀ハ量目拾文目ヲ限ル。以上過量ハ皆前條ノ割合ニ從ヒ其賃銀ヲ

收ムヘシ、若其各地支道ニ入モノハ每一里銀六分ヲ増ス。其他臨時日限遞送書狀時廻シ書狀仕立飛脚等何時ニ限ラス之ヲ發行スヘシ。但金銀遞送及先拂賃錢書狀ノ遞送ヲ爲サス。又荷物飛脚

ノ定日ハ毎月朔日六日十一日十六日二十一日二十六日ノ六回ト定メ、其量目壹貫目備前ハ賃銀三匁五分備中ハ五匁備後ハ七匁トナス』云々

右ノ文中米飛脚ニツイテ右書狀云々トイヒ、又別ニ荷物飛脚ノ定日ヲ記セルノミナラス所謂米飛脚ノ運賃ト荷物飛脚ノ運賃トノ間ニ大差アルニヨリテ考フルモ米飛脚ハ米穀ノ運搬ニ關スル飛脚ニ非スシテ、寧ロ米穀ニ關スル通信ナルヘシト考ヘラル。大阪ニオケル米價ノ騰落ハココニ藏屋敷ヲ置ケル諸藩(西國方面チ多シトス)ノ利害關係ニ及ホス所頗ル大ナルモノアルヨリ見ルモ、米穀ニ關スル諸般ノ通信ハ必スシモ無用ノコトニハアラサルヘキ也、況ヤ米穀ノ如キ容量大ナルモノノ運搬

ハ多クハ船舶ニヨリテ行ハレ、飛脚便ヲ以テ行フニ適セサルオヤ。ココニ掲ケタル余ノ解釋ニシテ誤リナシトセバ米飛脚ナルモノハ畢竟書狀通信ノ一種ニシテ飛脚ノ客體ニ新ナル種類ヲ加ヘタルモノトハ見ルヲ得サル也。

要スルニ飛脚ノ携ヘシ物體ハ信書ノ外、小荷物ヨリ金銀ニ及ヒ、又ソノ方法ハ現品遞送ノ外、爲替保險等ノ方面ニ亘リシコトヲ知ルヘキ也。

以上ハ客體ノ範圍ニ關スルモノナルガ、尙右ノ外、貨物ノ重量ニツキ制限ヲ加ヘタルコトアリ。尤貨物運搬ヲ主トスル傳馬ノ場合ニ一夫ノ擔量ヲ定メ一駄ノ駕量ヲ制限シタルコトハ履行ハレタル所ナルガ飛脚ノ場合ニツイテモ又同様ノ制限存シタル也。例ヘハ正徳二年(1712)ニ京都大阪及駿府在番諸士等カ過重ノ行李ヲ三度飛脚ニ託スルコトヲ禁シ、<sup>14)</sup>或ハ延享四年(1781) 三都飛脚商等カ過實目ノ行李ヲ發スルコトヲ禁シタルカ如キ是レ也。而シテ飛脚行李中ニ商貨ヲ混入スルヲ得サリシコトモ亦常ニ令セラレタル所トス。右ニ述ヘシ延享四年三都飛脚ニ對スル過重行李差立ノ禁止ノ際ニモ又ソノ行李中ニ商貨ヲ混入スルコトヲ禁シタリキ。然レトモ天明元年(1781)以來島屋佐右衛門ノ發スル水戸家公用及ヒ大阪屋茂兵衛ノ紀州家茶荷物行李中ニハ商貨及金銀ヲ混入スルヲ恒例トシ、又京都大阪両城番衆ノ書狀ニシテ京都越後屋彌兵衛大阪尾張屋七兵衛ノ發スルモノノ中ニモ亦商貨金銀ヲ混入セシガ何レモ不問ニ附セラレタリトイフ。天保六年(1835)再ヒ飛脚行李中ニ商貨ヲ混入スルコトヲ禁シ、若之ヲ犯スモノハ直ニ其宰領ヲ縛シ其行李ヲ解カシメ、八年右ノ禁ヲ犯ス者ハ本主係累ヲ併セ罪スル旨ヲ令セリ。蓋當時禁令弛廢ノ結果法ヲ犯シ商貨ヲ以テ武家緝紳ノ行李ニ擬裝シ或ハ飛脚行李中ニ混入スルカ如キコト屢アリタルヲ以テ也。

14) 享保令典永鑑卷二十二